

---

## 思いつき短編集。

ぽち子。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思いつき短編集。

### 【Nコード】

N7049N

### 【作者名】

ぼち子。

### 【あらすじ】

短かったりたまに長かったりする物語集。

自己満足を詰め合わせているので、説明不足で意味不明が多々あると思います。

気が向けば連作になるかもしれません。

基本は恋愛系。

異世界、現代モノ、ごちゃまぜです。

よろしかったらお暇つぶしにどうぞ。

悲恋系も普通に存在するのでご注意ください。  
キーワードは思いつくままに増えていくと思います。

約束しよう、（前書き）

バットエンドだと思います。  
苦手な方はご注意ください。

ここではない、異世界の国の設定です。

約束しよう、

政府によって民が弾圧されている国。

一部の特別階級を除き、すべてを管理され抑圧されている狭い世界。

国は荒れて、貧富の差は広がる一方だった。

それに不満を持った人々が大規模な反乱を起す。

以前反抗の意志があるとして無念に処刑された人々の、まだ成人の歳にも満たない子ども達も多く参加した。

「いけないで」

少年は国の粛清で親を亡くした子どもの一人で、少女も同じ境遇だ。

親を亡くし世の中に放り出されたときに出会い、それから身を寄せ合って必死に生きてきた。

いつしか絶対の信頼が生まれ、少年にとっても少女にとってもかけがえのない存在になっていた。

「大丈夫だよ。この戦いが終わったら総てが変わるんだ」

「でも…でも国に勝てる訳がないよ！」

銃を手に取り、これから反乱に参加しようとしている少年を少女が必死に止めた。

国は年端の行かない子どもであろうと容赦しないことは充分に思い知っている。

失敗しても成功しても、命を落とす確率は大きい。

だからこそ少女は少年を何度も必死に止めた。

そんな少女に安心させるかのように少年が少女の手を握り締める。

「総てが終わったら、ここを離れて…遠くに行こう…約束」

「絶対よ……！」

少年の真剣な瞳に少女はもう何もいえなくなった。

少年はいつもの優しい笑顔を浮かべ手を離す。

外では皆の士気を上げるための喚声を上げている。

これが終われば自由が待っているのだから士気も高まる一方だった。

「行ってくるよ」

銃を片手に少年は走り出す。

涙の止まらない少女は少年の後姿を見つめ続けることしか出来なかった。

この後政府は倒れ、体制は大きく変わった。

しかし反乱に関わった沢山の人々が、子ども達が犠牲となった。

「……約束、したのに……」

目を閉じて、思うのは少女のこと。

きっと少女は泣くだろう、出会った時のように。

今度こそ心は壊れてしまふんじゃないだろうか。

不思議と怖くなかった。

不思議と痛いという感覚がなかった。

ただ無性に寒くて寂しくて堪らない。

「ごめん…」

少女とした約束が蘇る。

誰も自分たちの事を知らない土地で二人で住むんだ。

そこは穏やかで、のんびりと畑でも耕して二人で作っていく。

隣りには、必ず笑って側にいてくれているんだ。

ずっと少女の泣き顔ではなく笑顔が見たかったのに。

「…約束守れなく…て…」

最後に少女の笑顔が見えたような気がした。

## 囁く秘密。

「…そうやって黙っているつもりなんだ」

窓枠に肘をかけてぼんやりと窓の外を見ていると後ろから話しかけられた。

春の陽気で日が当たり暖かく、この季節は特に眠気を誘う。

「…そうね」

投げ掛けられた質問を力なく返す。

正直、考えることが面倒で疲れていたからかもしれない。

「気のない返事」

隣りの椅子に勝手に座った男は少し呆れたように溜め息を吐いた。

教室には私とこいつ以外誰もいない、だからこそ話しかけてきたのだるか。

ちらつと男の学ランを視界に入れて、直ぐに視線を戻した。

「…別にいいじゃない。言ったところで何も変わらないわ」

私には幼馴染みの男がいる。

この前私の親友とも言える同じクラスの女子と付き合い出した。

二人は本当にお似合いで仲良しだ。

「…好きなのに？」

「……」

男の言葉に私は答えなかった。

一体何で私は隣りの男とこんな話をしているのだろっ、と疑問さえ掠める。

囁くように答えを返した。

「…私、二人の事は祝福しているのよ？」

「ウソツキ」

あまりの言い分に咄嗟に視線だけを向け、少し睨むように見る。

男は口許だけ笑っていた。

「……何よ」

別に、と返しながら男は立ち上がった。

「…それは潔いかもしれないけど……卑怯だ」

そう台詞をはいて、男は立ち去る。

やはりどこかぼんやりとその立ち去る足音を聞きながら溜め息を吐いた。

「…そうね…卑怯ね」

これで誰もいない教室で小さく呟く。

呟いた言葉は誰にも聞かれる事なく、消えていく。

消えていった方が、いいのかもしれない。

「…でも黙ってるのはそれじゃないの」

貴方は分かっている。

別に分かって欲しいとは思わない。

あの日、初めてあった日に貴方に言われた言葉を聞いてから私は訂正しなかった。

「…私、本当は貴方の事が好きなのよ？」

誰にも言うつもりはない、勿論親友にも幼馴染にも。

勘違いをしているなら、それでも良かった。

隣りこうしてすわってくれるのなら。

まだ私に笑ってくれるなら。

「…私はそれだけで幸せなもの」

秘密にも似た嘘を吐く。

こんな想いは誰にも言えない。

言うつもりもない、私だけが抱えていくの。

\*\*\*

いつものようにぼんやりと外を眺める女が視線に入った。  
忘れ物を取りに着ただけなのに、見つけてしまつて舌打ちしたい気分になる。

それなら無視すればいい、と思うのに自然と近寄っていく。

「そうやって黙っているつもりなんだ」

「…そうね」

話しかけても尚ぼんやりとした様子だ。

外には俺の悪友と女の親友が仲良さげに手を繋ぎ帰っている。  
どんな気分でそれを見ていたのだろうか。  
無性に苛立つ気持ちが抑えきれなかった。

「氣のない返事」

勝手に隣の椅子に座り、ため息混じりに零す。

女は少々わずらわしそうにちらつとこちらを向いたかと思えば、また視線を戻した。

「…別にいいじゃない。言つたところで何も変わらないわ」  
だったら何故そんなに寂しそうな表情をするんだよ。

いつになつたらその想いを捨てるんだよ。

「…好きなのに？」

女は返す言葉もなく黙り込んだ。

一瞬だけ泣きたい顔をするけど、やはり一瞬でそれを隠す。

「…私、二人のことは祝福しているのよ」  
祝福、ね。

その言葉を嘲け笑いたい。

「ウソツキ」

睨みつけてくるそれすらも。

もっと傷ついて思い知ればいいのに。

「…何よ」

「別に」

これ以上はきつともっと酷く傷つける。

椅子から立ち上がり、傷つける前に立ち去ろう。

「……それも潔いかもしれないけど……卑怯だ」  
女の表情を見ず、すぐに背を向ける。

卑怯、なのはどちらだ。

自分を殴りつけたい気分になる。

初めて会ったときから、きつと俺は彼女に落ちていた。

だけど、すぐに彼女の秘めた思いに気付いた。

ああ、どうか早く想いを捨ててほしい。

そして、どうか俺だけに笑ってほしい。

囁く秘密。(後書き)

すれ違い系の話です。

背景がもつちよっとうまく伝えられるようになりたいです。

## 檻の中で夢見る（前書き）

異世界恋愛系ですが、ファンタジー要素は皆無です。

どちらかというと痛い系の悲恋寄りなのでご注意ください。

別の作品である『愛しの花』が暗くしたらどうなるかと思いついた話です。

## 檻の中で夢見る

ルクレティア

彼女は誰もがみとれるような絶世の美女ではない。

ただ、優しく愛らしい女性であった。

豪勢な庭園を無気力に眺めるレティーシアが幽閉されてからどれほどの月日が経ったのだろうか。

彼女は12の時に、この豪華ばかりで自由のない宮に浚われて囲われている。

おかげで不自由はない。今まで決して受けることのなかったもてなしを受ける代わりに、心の自由を奪われた。

泣き喚こうが何しようが一切状況は変わることがない。

幼い身体はいつしか大人の女性へと変貌を遂げつつあった。

「ティア、こちらにおったか」

悠然と微笑むこの美しい男は、30は過ぎるというのに未だに何一つ衰えることはない。

その神に愛された容貌の男をレティーシアは敵のように睨み付ける。

この男こそがレティーシアをこの檻に閉じ込めている全ての元凶だ。

「そう怖い顔をするな。愛らしい笑顔を見せよ」

そつと傍まで寄り頬を撫でる男はレティーシアとして見ていない。ただ執着しているのはこの似ている顔だけだ。だからこそレティーシアも正気で居られる。

「私をここから出してください」

「それは無理だ。そなたは余の側で笑っているだけでよい」

「つ……私は母ではありません！」

男の言葉に恐ろしくなつてレティーシアは声を荒げた。

男はずつとレティーシアではなく、彼女の母を渴望しているのを知っている。

しかし、もう……。レティーシアもいつも続きを言うときは悲しい痛みを伴う。

「母のルクレティアはもう……此の世にはいません」

レティーシアが11の誕生日を迎える直前の冬の日だった。

よくある病にかかり見る見るうちに弱ってしまい、そのまま儚い人になってしまった。

ルクレティア、彼女の命はあまりにも短い。

それでも心からレティーシアを、彼女の父を愛してくれていた。温かい思い出の詰まる幼いときに、何度か強請って聞いた話がレティーシアは一番好きだった。

庶民の娘と王子様の隠れた幼い恋。

結末を彼女は遂に語ることはなかったが、レティーシアは二人は幸せになったのだらうと想像を膨らませていたのに。

「何を言う、ティア。そなたはここに居るではないか。もう二度とほかの男の元にはやらぬ」

ルクレティアは年頃の頃、自身の父が治める領地を貧困から救うために政略結婚をせねばならなかった。

その頃、夢に懸想していられるほど娘ではなかった。それを素直に受け入れる。

貴族とはそういうものであり、政略結婚は貴族に生まれてきたものの定めとも言える。

しかし10以上違う男との政略結婚にルクレティアは周囲から同情されたが、真実はそうではなかった。

相手の男はルクレティアに真に誠実であり、年の離れた妻を慈しみ愛している。

そんな健気な男に応え、ルクレティアもまたゆつくりと愛を育んだ。

結婚して翌年には娘を授かり、領地の回復も上向きとなり、全ては順風満帆だった。

その二人の娘が2歳を迎える頃、領地からは遙かに遠い王城で政権交代が行われる。

以前より患っていた病に倒れた父王に変わり、優秀な王子が王となった。

王子の頃から民に対して善政をしき国が潤いまた国立軍を強化している人物だ。

不正などを排除し清廉潔白な政治を行う王子に皆が慕い敬う。

王子が王となった今こそ、この国には憂いなどないと吟遊詩人に謳われるほどだ。

政権交代によりやや情勢は混乱するも、二年で収まり以前より住みやすい国となった。

地方に領地を持つ貴族もその陛下の力か、恩恵を受け益々発展させることとなる。

しかしあくまで遠い話でもあった。

レティーシアが4歳の誕生日を迎えた後、レティーシアの父が納める領地に立派で豪華な馬車が現れた。

幼いながらレティーシアはそのことをよく覚えていた。

馬車に乗ってきた気難しいそんな使者は、父と母にだけ何かを話している。

そして使者は母だけを連れて王都へと向かっていく。

悲しくなって追いかけようとしたレティーシアの肩を複雑そうな表情をして父が止めた。

父は泣いては居なかったが、どこか諦めている表情が印象的だった。

「もうどこにもやらぬ」

男はレティーシアを強く放すまいと抱きしめる。

本当は似ているレティーシアではなく、本物のルクレティアのことだろう。

いつもレティーシアはそれに抗うも、力の差は歴然とし叶わなかった。

抱きしめられ甘い言葉を囁かれると、レティーシアの胸に病ではない鈍い痛みが走る。

その痛みの理由も名前もレティーシアはまだ知らない。

王都へルクレティアが行ってしまってから一週間後にまた似たような馬車が領地に止まった。

馬車からはルクレティアが出てきて、寂しさのあまり泣きじゃく

るレティーシアを優しく撫でる。

その顔には悲しみもなく、ただ優しく微笑みを浮かべているだけだ。

王都の間に何があったかは分からない。ルクレティアはレティーシアに話そうとしなかったのだから。

ただ母は父の元に帰ってきた。幼いレティーシアにはそれで充分だった。

今考えるとそれは、きっとレティーシアを閉じ込める男を傷付ける結果となったのだろう。

幼い恋物語は実らなかった、そしてルクレティアは何も言わないまま此の世を旅立ってしまった。

そんなときにこの男は現れ、奪えなかったルクレティアのかわりにレティーシアを奪うのだ。

受け入れられなかった現実を忘れるために。

全て良く似ているためにルクレティアの代わりであるレティーシア。

それではどこに、レティーシアは存在しているのだろうか。

「ティア」

愛しいように言葉を紡ぐ。

ティアはレティーシアではない、ルクレティアの愛称だ。

この男は決してレティーシアを呼ばない。

「愛している」

愛しているのはルクレティア、それは解っている。

解っているがレティーシアは時々夢を見てしまう。

この美貌の男が、レティーシアをみてくれることを。

この狂った檻の中でいつしか夢を見ながら……。

繰り返す、非日常。(前書き)

ファンタジーのような不思議な話を目指して、訳のわからない話になっ  
てしまいました。

ちなみに続きはないです。

設定で楽しんでいただければ嬉しいです。

繰り返す、非日常。

「君が、好きだ」

夕暮れに染まる教室。

クラスでも頭がよく、爽やかで女の子からは憧れの存在。彼の人が私の目の前にいて、熱っぽい瞳で見つめている。このシチュエーション、誰もが憧れるだろう。

勿論普通の女の子の場合、答えはイエス。

しかし、私の場合は全く違う。

「お断りします！」

私は何度目か解らない断りの文句を口にした。

やはり思った通りなのか目の前の男子、宇都周は困ったように微笑んでいる。

その困ったように笑うそれに、やっぱり何度目か解らないため息をついた。

「いい加減受け入れちゃいなよ、時任雪菜さん」

「そちらこそいい加減諦めてよ、宇都周」

何度目か解らないやり取り……本当にこれが何度目か解らないやり取りだから参る。

一体いつまで続くんだとウンザリするけど。

諦めたわお仕舞いだ、私！

「で？今日は御曹司設定も、異世界召還設定もないのね？」

「ああ、だつてそろそろ変化球は飽きたでしょ？ たまにはストレー  
トに言ってみようかなって思つて」

私の言葉は何の冗談だ、と思われるだろうけどこれが本当なのだ。  
初めての告白から数十回、私たちは『何度もやり直し』をしてい  
る。

しかも最後のパターンは豊富で、先程いったようなものの他に「  
実は幼馴染設定」や「義理の兄弟設定」なんてものもあった。

ああ、「近親相姦設定」は寒気が走つたのを思い出したわ……。

「はいはい、じゃあまた明日」

「明日も同じ日になるよ？」

同じ日になっているのはどのどいつだ！

同じ朝、同じ授業内容、違うのは告白だけ。

友達の話は覚えちゃったし、授業も飽きた。

憶えているはずなのに、何度逃げてても『告白を受ける』ことは避  
けられない。

お気付きだろうけど、勿論私はこんな特殊スキル持っていない。  
超能力も真つ青な宇都周のこの特殊スキルは、『筋書きを書く』  
こと。

何もかもが、この宇都周の手のひらの上。それが悔しい。

「一体何それ、宇都周は神様なの？」

「神様じゃないよ、極々普通の一般人さ」

極々普通の一般人がこんなことできる訳ないっつーの！

心の底からの憤りを感じながらも、しかし神様ではないのかと一  
つ納得。

うつん、意外でもなかったんだけどね。

神様ではないけど、筋書きは思いの通り。普通じゃないのは確か。

「それを言うなら、今ままで僕の筋書き以外のことをしでかしたのは君が初めてだよ」

……この愉快そうな顔。私まで変な人みたいに言うのはやめんかい！

ぐにやりと世界は曲がる。今日も、今日が終わる。

「絶対に折れないから！」

「折れるまで、後何回だろう？」

楽しいな宇都周と、悔しげな私。

これって本当に愛の告白なのか、今日も私は謎に思う。そうやって繰り返される、非日常。

**魔王城は平和日和。（前書き）**

いろんなパターンの魔王と勇者シリーズの第一弾です。  
いろいろなパターンで書ければと思います。

## 魔王城は平和日和。

「魔王、覚悟しろ！」

勇者と名乗りをあげる一行が意気揚々と、魔王の棲家とされている城に足を踏み入れた。

勢いのまま門を潜った途端、剣を構えたまま固まる。

……あまりにも自称勇者一行は場の雰囲気になかなかつたのだ。

通称『魔王城』は日が燦々と降り注ぎ、楽しそうに小鳥達が樹木豊かな庭で戯れている。

日の光を目一杯受けているのか緑はどれもよく育っていて、だからといって放置されているのではなく調度良く整えられていた。

今のところ人の気配はしないが、どこからか香ばしいパンの焼ける香りさえ漂い穏やかな雰囲気だ。

ここが魔王の棲家だって？

自称勇者の一行に同じ考えが過ぎて、暫し周りの景色に見惚れた。

「……お客さん？」

茫然としている一行にいつの間にか現れた誰かが声をかける。

声の方をいつせいに振り向くと、やけに顔の整った優しげな男がいた。

庭作業着姿のその男は悠然と微笑んでいる。やはり美形は何を着ても似合うのか、そんな想いが一行に過ぎたが。

「その格好からすると……『勇者ご一行』？」

穏やかに問う声に一瞬この場所がどこか忘れそうになるが、問われた言葉に自身たちの目的を思い出す。

しかし目の前の男が魔王とも思えない。と仲間内の視線で会話する。

いくらなんでもこれはあの噂に聞くような、『極悪非道な魔王』のイメージではない。

見た目だが自称勇者一行の魔法使いのポジションと思われる女が勇気を出して男に問う。

「あの……ここは魔王の棲家ですか？」

女が言った瞬間、一行に何とも言えない違和感が襲う。

こんなに見るからに穏やかで平和な城に何ていうことを、そんな罪悪感すらする。

男は考えるように首を傾げてから、まるで見たものを蕩けさす様な笑みを浮かべた。

不意にその笑顔を真正面から見てしまった女、だけではなく何故か男も含め一行全員が見惚れる。

「一般的にはそう言われてますね」

見惚れていて、一転。

一行は男の言葉に我に返り、自身の武器を構え直した。

「さては貴様、魔王の手下か!？」

一行のリーダーでもある自称勇者は、果敢にも男に対し吼える。

しかし男は怯えることも気にする様子もなく、先程から温和な笑顔を崩さない。

「まさか。俺は手下でもないし魔王本人でもありませんよ」

「じゃあ、魔王はどこに居る!？」

一行は魔王討伐のためにここまで来た。

語れば長いと思われる経験をつみ、討伐できれば約束されている未来を糧にただひたすらここまで来たのである。

そんな涙ぐましい一行の努力に、男はあっさりと逆に問う。

「それを聞いてどうするんですか？」

あくまで男は始終温和な笑顔のままであるはずなのに、見えない威圧とどこからかの畏怖を感じる。

剣を抱えたままの自称勇者一行は本能的に後ずさりをした。

目の前の男のその手に持つものは剣などの武器ではない、ただの  
ジョウロだ！

そう言つて自身を叱咤するが、誰一人として動けない。

圧倒的にこちらの方が優位のはずなのに、一行は何故か追い詰め  
られていた。

「いいいや、そのっ！」

「あの子に手を出すのでしたら……見逃すわけにはいきませんね」  
ようやく一行は気付いた。

男は『温和な笑顔』だが、その目は全然笑っていない。

笑っているのに笑っていないという真実に、気付きたくなかった  
と皆の心が一致した。

「やめんか！何喧嘩売っているのだ！？」

いよいよ命を覚悟した瞬間に、割つて入るかのように響いたのは  
可愛らしい少女の声。

腰が抜けそうな一行が見た先には、艶やかな黒髪を巻き毛にして  
いる可愛らしい少女が居た。

しかし今の状況には限りなくそぐわない。

「……先に喧嘩を売りにきたのはこの方々ですよ」

「貴様は問答無用で塵屑にする気であつただらう！？」

男は少女の言葉に否定せず、ただ笑顔を返す。

それが肯定だというのは、先程の空気から嫌だというほど解つた。  
少女は男から一行に視線をやる。

「すまなかつたな。そなたらは我が城に何用じゃ？」

「い、いえ。私たちは魔王に……」

「そうじゃつたか、出迎えが遅くなつた。我に何のようじゃ？」

「え？」

「え？」

一行と目の前の少女はお互い顔を見合わせた。

少女の言葉から察するに、この城の主である魔王は目の前の人物

らしい。

「えっと、極悪非道で近隣の国を滅ぼしまくっている魔王って……」

「我は無駄な殺生はしておらぬが」

「ちなみに近隣の国は他国と戦争して勝手に滅びましたよ」

隣にいた男が話に一言付け加える。

少女が不思議そうな顔をしたので、少女にだけにつこり笑顔を向け説明を続けた。

「ほら、前に難民受け入れしたではないですか。あの難民達の故国の話ですよ」

それにしても、この男は先程から少女に蕩けんばかりの甘い微笑を浮かべている。

少女は気付いているのか無視しているのか何ともないが。

男の言葉に少女はようやく合点がいったようで、それでいて何故そんな話が引き合いに出されているのか解っていないようだ。

「さて」

空気だった自称勇者の一行に、男は視線をやる。

その視線だけで身を縮込ませて固まってしまう。

本当はこいつが魔王じゃないか、とも思えてくる。

「こちらは魔王討伐のための勇者一行です」

「勇者？」

少女、もとい魔王は不可解なものを見る様子で一行を見つめた。

そして不思議そうに自称勇者一行ではなく隣にいる男を指差す。

「勇者ならここにおるではないか」

魔王には魔王としての証があるように、勇者にも勇者たる証があった。

魔王は魔を統べるもの。

勇者は聖剣を従えるもの。

数年前に聖剣を携えた勇者は現れ、突然姿を消したままだった。

それ以来、魔王討伐をめざす勇者を名乗る者が増えた。

「ゆ、ゆうしゃ……？」

本物の勇者には数々の武勇伝があった。

いわく、その一太刀で魔の行軍をなぎ倒した。

いわく、魔に支配されていた国を解放した。

姿を消して尚憧れる存在が、今目の前にいるらしい。

「そういえば、そう呼ばれたこともありましたね」

それを、まるで今思い出したかのような男。

伝説の勇者に密かに憧れていた自称勇者はこの世の全てに絶望したい気分だ。

いやきつと魔王に唆されているに違いない、とこの際都合よく脳内変換した。

「とにかく魔王、覚悟！！」

話を立て直すべく、自称勇者は魔王と思わしき少女に剣を向ける。いくら艶やかな黒髪の似合う美少女だとしても、ここで引くわけには行かない。

「いい度胸ですね」

と、少女の目の前に勇者だという男が立ちはだかる。

「我に応えよ、破魔の剣、」

魔王に対して絶対唯一行使を持つ剣といわれているそれは勇者の言葉に従う。

勇者の声に応えて厳威な佇まいの剣は、突如姿を現した。

魔を倒してその身が染まったといわれる黒が刀身のその剣は、従えるものである勇者の手にすんなり収まる。

「さて、覚悟してくださいね」

につこり笑う勇者に、自称勇者一行は震え上がった。

この日、城からは大きな破壊音とともに恐ろしいほどの悲鳴が上がったという…。

「こんにちは、魔王様。お花を頂戴致しますね」

「おお、今日も綺麗に咲いて居るぞ！」

「いつもありがとうございます。あら？あの方たちはどうされたのですか？」

「ああ、よく解らぬが『罪滅ぼし』とやらだ」

魔王城に訪ねてきた城下町に住む女性と魔王の視線の先には涙ながらに裏庭の土を耕す自称勇者の一行がいた。

どうやら戦いで滅茶苦茶になってしまった草木を整えよ、という命が勇者によって下されたらしい。

命を下した本人はここにはいない、恐らく他の庭の草木の世話に言ったのだろう。

姿なくともサボらずに一行は従っていた。サボると恐ろしい事が

待っているからではあるが。

「また無謀にも魔王様に挑戦された方が勇者様に肅清されたのですね」

この女性は魔王の曖昧な話ですぐに合点がいったようだ。  
ちなみに魔王は未だによく解っていないが。

「では彼らの住処を城下町にご用意しておきますね」  
何を隠そうこの女性もかつて魔王に挑戦し、勇者に敗れたものだ。  
何だかかんだと留まっていたらいつの間にかに住み着いてしまっ  
た。

城下町にはそういった者が多く、受け入れられてもいた。

「よく解らぬが、よろしく頼む」

そして今回の１８９人目の自称勇者一行もここに住みつくのだろ  
う。

その予想は数カ月後に見事に当たる。

勇者がなぜか守る魔王城に挑むものは耐えない。  
そして夢が破れ、思い知るのだ。

魔王より恐ろしいものが住み着いているのだと。

とにかく魔王城は今日も平和である。

## 週末の恋人（前書き）

唐突に書きたくなったお話です。

現代系の男女の恋愛物です。

細かい設定にはどうか目をお瞑りください。

## 週末の恋人

「春佳、何やってんの？」

あまり広くない1LDKのリビングに座り込む春佳に声をかける。広げていた新聞に見入っていた春佳は、掛けられた声に顔を上げようとした。

それより早く、声をかけた男は春佳を後ろから抱きしめる。

「ちょ、上総」

「なになに、世界情勢？珍しいところ読んでいるね」

後ろから抱きしめていたまま、上総は春佳の手元を覗き見る。

偶々広げた頁が世界情勢の欄だっただけだ。

春佳は何となく視線で追って、つい新聞を読んでいた。

そつえばこうやってゆっくり新聞を眺めることを最近していなかった。

思ってから、春佳は上総を横目に見る。

「食器洗い、終わったの？」

「うん、だからこうやって春佳にじゃれてんの」

すりすりと頭を寄せると、上総の髪が春佳の首元に当たる。それがくすぐったく感じて、どかそうと身を振るがそれを許さない。

こうなったら、この強引な男は飽きるまで止めようとしな

長くない付き合いの中でも春佳は知っている。

ふと、この状況に慣れてしまったことに春佳は気付く。

この男のことは名前しか知らないのに、こうやって自宅にあげて夕飯を食べて。

「なにを、考えている？」

首もとのくすぐったい髪の間から、柔らかな感触に変わる。

それでも充分にくすぐったいが、やはり肩を押さえられているため逃げ出せない。

その柔らかな感触は、上総に唇だ。

わざとらしく、ちゅっと音も立てている。

「……別に」

「ふーん？」

「っていうか、どいて。私、つめ切りたいの」

ようやく本来の目的を思い出す。

伸びてきた足の爪を切ろうと思って、飛び散らないように新聞を広げた。

そこから春佳は新聞を見入ってしまった。

上総が夕飯に使った食器を洗い出してからだから、結構な時間はたっていたようだ。

春佳の言い分どおり持っている爪きりを上総は見つめて、にやりと笑う。

「俺が切ってあげるよ」

「嫌」

「いいからいいから」

ひょいっと強引に、春佳から爪切りを奪う。

にこにこ優男風なのに、この男はとことん強引なのだ。

知り合ってこの半年、いやそれ以上の月日がたった中で、春佳は充分に思い知っている。

上総は春佳をようやく開放したかと思うと、前の方に移動してから足首を掴む。

「上総！」

「ほら、足の力抜いて」

上総の手が、春佳の足首から足指までをすつと撫でる。

そのぞくりと背筋に這うような感覚に、耳が熱くなったのを春佳は気付かないふりをした。

春佳の様子に一つ含み笑いをした上総は、爪切りを持ち直して親指に当てる。

どうやら本当に切るみたいだ。

「春佳って、爪の形綺麗だね」

「そうかな……」

ぱちん、ぱちんと二人の間で響く。

人の足の爪を切る行為は難しそうに思えたが、器用に切っている。伸びた爪が上総の手によって、綺麗に整えられていく。

「はい、右足終わり。次は左足だね」

やはり両足か、と諦めの境地で素直に春佳は足を差し出す。

同じく爪を切る姿を、ぼうつと眺める。

上総の容姿は整っており、強引だが社会人らしくある程度常識も

備えている。

所々『普通』じゃなく謎めいているが、こつやって過ごす分には気にならない。

それが、出会った10ヶ月前から週末限定だとしても。

「はい、終わり」

はっと、思考から戻ると左足も綺麗になっていた。

ようやくこの恥ずかしい体勢から開放される、と思ってそろりと春佳は足を引く。

それを許さないかのように、上総は春佳の足首を掴んだ。

春佳の爪をなぞったかと思うと、そのまま足の甲に唇を落とす。

「ちよつと、上総！」

「お風呂に入っていたから汚くないでしょ。白くてすべすべしているから美味しそうだね」

「なっ……」

そついう問題でもなく、その行為自体が春佳にとって恥ずかしくてたまらない。

時々お前は日本人か、と問いたくなるような行為を平然とするのだ。

顔を赤くして足を引こうとした春佳の足を、逆に強く引っ張る。

その反動か、春佳はカーペットに転がった。

背中にはクッションがあつたので痛くないが啞然としていた春佳に、上総は覆いかぶさる。

「それじゃ、いただきます」

「上総！」

降りてくる顔を、両手で何とか防ぐ。

春佳の防御にずっとにこにこしていた上総の眉が寄る。

しかし春佳からすればそんなことは知ったことじゃない。

「明日は月曜日なんだけど！」

「構わない」

「私は構うんですけど！」

上総のことは知らないが、春佳には会社勤めがある。

間違いないと迫りくる自身の危機に、春佳も必死だ。

そんな春佳に、上総は笑いかけた。

あくまで上辺だけの笑みに一瞬春佳は怯む。

「まったく二回も邪魔して、覚悟はいいかな？」

言葉を失う春佳に、上総は今度こそ唇に口付けを落とした。

言い返す手段をとうとう奪われた春佳は、諦めの気分でそれを受け入れる。

そうやって、意識は堕ちて行く。

結局、美味しく戴かれました。

## 週末の恋人（後書き）

ただ、甘い雰囲気の二人を書きたくなって書きました。  
爪きりの部分を書きたくて、書いているうちに上総さんが謎の人に  
いつか続きを書ければいいですが、まずは今の連載のほうを頑張  
ります。

お読みいただきましてありがとうございます！

## 週末の恋人2（前書き）

前作の週末の恋人と同じ設定の二人です。  
何だかんだと続いてしまいました。

## 週末の恋人2

晴天の空に、ベランダで春佳は目を瞬かせる。

冬も終わり、春に向けて日々暖かくなってきた。

春に向けて人は大体心が軽やかになるというのに、それに反比例して春佳の気持ちはどんどん沈んでいく。

思考を追いやってとりあえず今は目の前のことに集中する。

ようやく洗濯物を取り込んで、一息ついて部屋に戻った。

すると春佳以外にもう一人居た。

「上総、来ていたの」

「うん、時間が空いたから春佳に会いに来た」

この週末限定で現れる男は、毎週来るとは限らない。

毎週来たかと思うと、突然二回続けて来なかったりと気まぐれだ。春佳もいつも待っているわけではないが、何となく来るとも言えずにいる。

いつの間にかに春佳の家の合鍵を持っている上総とは一体どうなんだと思う。

上総のことは本名も、住所も、何の仕事をしているかも知らないというのに。

それでも全てどうでもいいことだ、と考えるのをやめた。

「……なんか元気ないな、春佳」

「……そんなことないけど」

「そう？」

時々上総は、ふつと癖のある笑いをする。

いつもの冗談っぽい笑みではなく、何か含んだような笑み。本質的には気の許せない人だと、見るたびに春佳は思い知る。話を変えるように、上総から台所の方へ視線をやった。

「上総、珈琲入れて」

「……はいはい、解った」

どちらかというと春佳は紅茶より、珈琲派である。

かといって本格的に拘るのではなく、美味しく飲めるならばインスタントであつても構わない。

ただ春佳が入れるより、上総が淹れるほうが美味しいのははっきりしていた。

それを知っているから上総も文句を言わずに淹れてくれている。

部屋に珈琲の独特の香りが漂うと、春佳の心も落ち着く。

「はい」

「ありがと……って、それ何」

上総からマグカップを受け取ると、違う方に皿を持っているのに気付く。

皿にはクッキーとマシユマロがのっついていて、それをテーブルに置いた。

こうやって上総が茶菓子を持つてくるのは珍しい。

大体お菓子を用意するのは春佳の方だからだ。

「はい、あーん」

上総がマシユマロを持って、春佳の口元に持っていく。

そんなことをしなくとも一人で食べられるが、いつもの上総のち

よっかいなのだろう。

反論する気も起こらず、不本意だが素直に口を開けてマシユマロを食べる。

すると上総は満足そうに笑んだ。

「何でマシユマロにクッキー？」

「うーん？」

妙に上機嫌に今度はクッキーを手にし、同じように食べさせようとしてくる。

その行動に訝しりながら、同じく口に含む。

スーパ―にある市販のより美味しいから、どこかのお店のなのだろう。

できれば自分の手で食べたい、そう思いながらクッキーを飲み込んで珈琲に手を伸ばす。

「美味しい？」

「……美味しいから、自分で食べてもいい？」

一応だめもとで聞いてみたが、案外あっさりと春佳の前に皿を置いた。

珍しい、とまた驚きつつももう一つクッキーに手を伸ばす。

アーモンドがまぶしてあって、香ばしく美味しい。

珈琲にも良くあっている。

「何でお菓子なんて買ってきたの？」

「何でだと思っ？」

質問をしたら質問で返された。

正直そういう風に返されるのは好きではないが、からかう様な上

総に考え込む。

何か、あっただろうか。

春佳にはこういったお菓子が食べたいと言った記憶はない。  
かといって上総が進んで甘いものを食べているところも見たことがないというのに。

「あとこれもあるよ」

そういつて、小振りのビンを置く。

ビンの中には色とりどりの小さな玉が入っている。

「これって、キャンディー？」

「そう」

「でもなんで……っ！」

キャンディーなのか、と聞く前に春佳の言葉は途切れた。

上総の唇によって塞がれた口内に、遠慮なく舌が割って入る。

その舌の感覚がと思えば、途端に甘くなって春佳は驚く。

小さな異物を受け止めながら、上総に口内を舌で撫でられようや  
く開放される。

春佳に口の中に残ったのは、ビンに入っていたであろう小さなキ  
ャンデー。

「……いきなり何するのよ」

甘いそれを吐き出すわけにもいかず、口の中で転がす。

それが口移しされたもので、春佳に取っては埋もれたいぐらい恥  
ずかしいが。

そんな春佳の様子が面白いのか、上総は先程から笑っている。  
恐らく、最初からコレが狙いであつたのだらうけど。

「いや、先月にホットチョコレートをご馳走になったから」

上総の言葉に、春佳はぴたっと動きを止める。  
意識したわけではなかった、ただ何となくで。

それを上総に言っただけでもないのに、この男はいちいち覚えていたようだ。

「別にあれは……」

「嬉しかったからつい『お返し』をね」

それにしてもやりすぎだ。

お返し、に含みがあるとは思わず、つい口に出そうになった。

あまりへんなことを言っていると、揚げ足を取られかねないことは学習済みだ。

「それにお返しは三倍返しが常套、だろ？」

上総のそれはそれは綺麗な笑みに、春佳は何もいえなくなつて黙り込むしかなかった。

頭の片隅で、週末があげるとホワイトデーということを思い出しながら。

## 週末の恋人2（後書き）

ホワイトデーに関連して何か書きたいなと思いついたのがこの二人でした。

相変わらず細かい設定に関してはお許しください。  
次こそは、連載の方を更新します。

お読みいただきましてありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7049n/>

---

思いつき短編集。

2011年3月9日03時25分発行